

ぶどうの木

— 第 4 号 —

目 次

巻 頭 音

入信当時の思い出

想 かいあかし

エスの御腕に托かれて

日 田 孝 枝

日 記 断 片

いのちの泉

俳 句

入信のあかし

短 歌

栄光ハレルヤ

一番楽しい時回世

ある母親からの手紙

詩「新じゃが」世

目目これ感謝

うべ われはきゆつりを得るかな(1)

榎本 牧師 (1)

高木 勲夫 (2)

I (4)

H S 生 (5)

志岐 心み子 (7)

小羊 道人 (8)

M S 生 (11)

正野 義雄 (12)

貝子

天野 季太郎 (13)

榎本 利三郎 (17)

S S 生 (18)

伊規 須太郎 (19)

榎本 利三郎 (20)

正野 貞子 (22)

永和

岡嶋 ミヨ子 (24)

伊規 須泰子 (26)

八幡前田教会

櫻本 牧師

天国は一粒のひらし穂のようなものである。
ある人がそれをとって畑にまくと、それは
どんな種より小さいが、成長すると野菜の
中でいちばん大きくなり、空の鳥がきてそ
の板に宿るほどの木になる

(マタイ一三・三一―三二)

この「さとうの木」はサフラン会議として、小さい小
さい会議でありました。主のめぐみにより、会員の皆
さんへの信仰に育てられて、こゝまで成長いたしました。
内容も印刷、製本などまだまだ幼稚の域を出ません。、
会員の皆様の主に対する信仰と感謝に満ちた、まじ
りごうのこもった素晴らしい会議であります。

世にみる本は、興味をそそぐ記事はありますが、それ
ぞれ何等かの脚色をして、真実から遠いものです。
けれども「さとうの木」は主にある生活の場から生れ
た、コフィア・ジョンの真実に生きた記録であります。
この信仰の生命がやがて鳥を宿すほどに成長すること
と信じております。

私も一粒のひらし穂のような小さい存在でありまし
ても、生命の言葉にひたたく立ってまいりますならば、
主のめぐみにより、多くの人々に主にある希望と平安
を届け与える者となることを下すいたします。

入信当時の思い出

高木敏夫

私が初めて、前田教会の門をくぐったのは、昭和二六年五月のある聖日であった。

当時の教会は増築以前で、ベニキは二列であった。石端に二脚、窓にそって縦に並べてあった。

私が膝を下したのは、そのうちの一脚であった。礼拝はすでに始まっていた。みんな大きな声で神を讃美し、

また祈りを捧げていた。今まで三か月の求道生活を送った正教会とは、その雰囲気は全く違つように感じた。

やがて牧師先生の説教が始まった。若高く、色浅黒く、顔はピカピカと光を放ち、威厳があった。旧約時代の預言者を思わせる風ぼうであった。その口をついて出る言葉は力強く、私の心にグイグイと食い入った。

私徹直感的に「私の求めていたものを満してくれる教会は、ここだ。」と思った。それから、私の前田教会での求道生活が始まったのである。

渴きに渴いた大地が水を吸い込むように、私は先生の説教をまさほり聞いた。そして、集會に大きな喜びをも

つて、勤んで出席した。

その頃、ほとんど時を同じくして、伊現須兄、東兄妹が教会の門を叩いたのであった。

東兄とは、現在、別府野口教会牧師であり、妹とは、現伊現須夫人である。伊現須兄と私は、共に同じ寮に住んでいた。当時の彼は、キリツと引き締った体格をしていた。いつも旧海軍の草色の軍服を着て、その動作には

節度があった。彼は兵學校出身の旧海軍士官であったと

のことであるが、そんなところを全表面にあらわさなかつた。「能ある鷹は爪を隠す」とは、全く彼にあてはまる語である。

次に東兄妹であるが、当時住んでいた西水道町の家からいつも連れだつて仲良く出席していた。その頃の東兄は、父親ゆずりの黒車のカバンを下げ、下駄はきであった。

妹の泰子さんは、高枝を卒業したばかりであったが、その求道ぶりは真剣そのものであった。女性のオンヤシなにかには全然興味を示さず、なりふり構わず平氣な小うをし

ていた。

東兄は、泰子さんを「ヤンコちゃん」とやさしく呼び、泰子さんは「お兄ちゃん」と甘えた声で呼んでいた。

私はこの兄妹の仲の良さを見て、内心づらやましく仕方が

なかつた。私にもう才下の妹がいるが、一言目にはホカリとやったもので、実に天地の相違である。

私を含めてこの四人は、礼拝は勿論、各集会に一回も休まず知んだ。お互い良い意味でのライバルであった。

この三人は私にないものをそれぞれ持っていた。私はその人柄から多くのものを教えられた。このグループは年令がそれぞれ三つづつ違っている。私が流嶺の甚六である。次が伊掇須兄、東兄、琴子さんの唄である。

教会での水曜と土曜の会堂掃除は、実に弊しみてあった。みんな喜びと感謝をもって奉仕にあたった。終つたあと、牧師館で、夕食のふるまいにあづかるのが常であった。先生を囲んで一同、靈感歌二六番、今に至るこそ主の恵みなれ、手を打ちながら讚美し、此からなる感謝の祈りを捧げて、食事をいただくのであった。一同は平安と喜びと感謝と希望に溢れていた。

後になつてはなはだ申し訳ないが、次に先生御夫妻に於いての思い出である。

私は求道し始めて約一カ月くらい経つたある日、感謝の意をあらわすため、バナナ一房を持って牧師館を訪れたのである。時に食事もあつたが、お二人は私を心から迎えて下さり、一緒に食事をすまされた。お二人は私を心から

そして、旧聖隊のアルミの食器にご飯をよそつて下さった。私はその頃、食前の感謝なるものを知らなかつたので、そのまま箸を口に持つていこうとした。すると先生が「一言お祈りしましょう」と言われてお祈りをなさった。私は恥かしくなった。

その頃、俵雄さん、和彦さんが小學校の三、四年生であり、咲子さんはまだ入学前、誠ちゃんが生れて三か月くらいの赤ちゃんであった。

この日を機会に、私の牧師館通いが始まつたのである。集会のない時は、「先生、今日は何かすることはありませんか」とこんなことにかこつけては、よく行ったものである。私は牧師館での先生御夫妻の私生活を遍して、いろいろと学ぶところが多かつた。

先生は当時、健康のすくれなかつた天人をいたわり、炊事、洗濯、拭き掃除、水くみ、風呂たき、薪割り、アイロシかけなど、なんでもされた。驚くほど手際よく、また早かつた。それをして、してやる“というよつな素振り、は全く感じられず、お二人の会話には笑いが絶えなかつた。今まで「オイ、コラ」式の夫婦生活しか知らない田舎出の私にとって、すべてが驚きであつた。

先生の信、夫人の愛、共に相補つて、「銀のほりもの」

金のリンゴをはめたまがぬし。」とある故書の聖書がど
たりあてはまるお二人であった。

最後に忘れぬことのできなかに思い出は、今は主のみもと
にある河本さんのことである。

河本さんほどくにお忙しい時にも、礼拝は必ず守られ
た。男子席の一番前が、その定席であった。お祈りの
初めには必ず「御名と御宝血を崇めます。」と言われた。
また夜の集會、早天祈禱会にも、御夫婦していつも出席さ
れていた。

河本さんは、講壇から説教されることはなかつた。ま
た我々と親しく話しかれることもなかつた。が、その
信仰の歩みは常に「神ヤー」であった。「まず神の國と
神の義とを求めよ」との聖言を、そのまゝ実践された人だ
であった。そして終始一貫、先生を神の僕として敬い、礼
儀を盡くすとともに、陰に日向に先生を助け、教會のため
に盡くされた。前田教會において、先生と信者との間に
問題がないのは、河本御夫妻のこのような信仰とその歩み
にあづかっていると思つ。先生ご夫妻の信仰と人柄がそ
のヤーであることは論をまたないところである。

河本さんの信仰の歩みは、私の模範であった。今に至
るまでつてある。私と河本さんにならぬ、及ばずながら

先生の伝道を助け、教會のために盡きたいと願うものであ
る。

他にもいろいろと思ひ出はつたが、このへんで筆を
置くことにする。



短かいあかし

それは「お帰りなさい」という一言だけです。

こんな短かいあかしがあるでしょうが、ひどく酔つて
帰つてきた息子、玄関口で大きな声を出してわめいてい
る息子、それを抱きながら語った父親の一言です。いら
立つた、投げやりなき業ではありません。しっかりした
調子のその一言の中に、祈りをこめ、信仰をとつて神を仰
いでいる父親の態度が余りにもはつきりとつのがわれ、思
わす襟を正しました。

今でもその声を忘れることができません。

イエスの御腕に抱かれて

H. S. 生

菊花のおる花壇の回り、やつと歩きはじめた女の子、兄と何やら語り合ひ、秋のすがすがしい空気を胸いっぱい吸い込んで、楽しそうに遊んでいる。

「まほ神の国と神の義を求めよ」

早朝、主人を送り出し、私は今、子供の遊び声を耳にしながら、聖書をひもとみ学んでいる。

「ほむべきかな、我らの主イエス、キリストの父なる神その大いなる憐愍に應じ、イエス、キリストの死人の中より救え給えることにより、我らを新に生れしめて生ける望をいだかせ、我らのために天に薔えある、朽ちず汚れず萎まざる嗣業を遺がしめ給えり。」

(ペテロ①・三・四)

何とすばらしい神の祝福でしょう。心から王を讚美し感謝いたしました。

その後ほどなくして急に、私は吐き気を催し、胸部に強い圧迫感と苦痛を覚えました。「奥さん、胸が抜ですよ。まあ、どうしたのですか、今すぐお医者さんをお呼び下さいますか、ね。しっかりして下さいよ。」

私は遂ぐに聞えるとなたかの声に目をさました。

それはお隣りの奥様でした。子供達はどこへ逃げたに、てしまつたのか、誰れもいない所で苦しみ倒れている私を、まはすぐにその御手を動かし、その方を導かれたのです。その時の心臓部の激しい痛み、それは口では言い表わすことができないほどのものでした。

御近所の方々の温かい御配慮のもとに、主の痛えたもう温かいベツトに運ばれました。やがてお度の方が、幼い男の子の元氣な歌声が聞えてきました。

「主われを愛す、主は強ければ、われ弱くとも恐れはあらず……」 (讚美歌四六一番)

私はうれしくて感謝で涙があふれて、どうすることもできませんでした。そして、十字架の主をほんまじりと見上げることができました。

警察の方の連絡で、主も会社から急いで帰って来ました。彼は私の顔を見るなり、何より先にお祈りして下さりました。それからしばらくの間、安らかな眠りへと主は静まき給いました。ふと目がさめると、再び強い発作がおそつてきました。

「患難の日にわれを呼べ、われ汝を助けん。しかしまわれを救ふべし」 (詩五〇・一五)

「……お医者さまより、まず榎本先生を呼んで下さい」
蚊の鳴くような声でした。電話聲がすすさま、榎本先生は八幡から遠い所まで、暗い夜道を駆けつけて下さいました。先生は病める者の顔に手を当て、敬けんな祈りを捧げて下さいました。

「汝らのうち病める者あるか。その人、教会の長老たちを招け。彼らは主の名により、その人に油をぬりて祈るべし。さらば信仰の祈りは病める者を救めん。主、かれを起したまわん。」（ヤコブ五、十四、十五）
昔、ペテロとヨハネが祈るために宮へ上って来た時、窓の美しの門で、足のさかない者に対し、ペテロが「金銀は我になし。然れど我に有るものを汝に与ふ。ナザレのイエス、キリストの名によりて歩め。」と云って、彼の右の手をとって起した時、躍り上って立ち歩きました。そのように主は今なお、聖言を信じて主にすばらは、病いやせるべしと、イエスの名がそれを信する信仰のゆえに、私を強くして下さいました。

自分の力では立つことはおろか、舌を出すこともできない、指ひとつ動かせないこともできないのほどに弱っていた私は、誰の手を借りることもなく、すっと立ち上ることができたのです。もちろん、胸の苦しみも大へん楽にな

りました。この御業は、神には当り前のことですが、私には奇跡でした。

その後一人で食堂へ行き、そこで先生がまた、深い感謝の祈りを捧げて下さったので、はっきり覚えております。そして先生と一緒に、主人が用意してくれた温かい食事と、感謝の中にいたりました。

翌日には、榎本先生の奥さま、高木^神のお二人が、早速駆けつけて下さって、お祈りがなされました。そのうえ、肉親にも懐る手厚い看護、子供の世話までしていただき、ただ感謝でいっぱいになりました。

それから一ヶ月後、再度強い発作に突然おぞわれました。「神はわれらの慰け所、また力なり、悩めるときのことと云ふ、近き助けなり」（詩四六、一）のみ言葉に導かれて「あ、神様、どうぞお助け下さい。憐れんで下さい」と此の中で祈りました。

丁度その時、バタバタと足音、今までどこへ遊びに行っただのか、幼ない兄妹が息せき切って帰って来ました。私の姿を見るなり、「お母さん、どうしたの、ここが苦しいの?」と兄の方が私の胸を指さしました。

私はうなづきました。「ぞしたらね、僕がお祈りしてあげようね。僕がお祈りしても神さまは聞いて下さる?」

私は「うん、聞いて下さるよ。」と心の中で返事しながらうなづきました。いつも横本先生がなさるやうに、もみじのような手をいっばいに開いて、私の頬に当て大きな声で、「恐るるなかれ、たゞ信ぜよ。汝の病、十字架に移転せり。アーメン」

昔、主は片輪や病める者をことごとく癒し給うたことは今もなお変わらぬ、お祈りが終るの終らないうちに、私の胸の苦しきは、スーと楽になりました。

いつも礼拝堂を走り廻って、皆様に「平安はかりかけ、また、お説教中の横本先生のことばまで行って、大きな声で讃美歌を歌っては、親をハラハラさせてばかりいる子供なのです。この幼な子の小さな祈りで、こんなにも癒されるなんて、私は大変驚き、思わすしっかり抱きしめて、心から主の御愛に感謝いたしました。

「われは全能の神なり、汝、わが前に歩みて完全のれよ。」(一創一七・一) が示されて、主により頼むとき、如何に大きな平安とよろこびが与えられるかを教えられました。

今はおみ言葉 信じて主イエスに
すがらば病は いやなるべし
ハレルヤ！ ハレルヤ！

日曜学校

志岐ふみ子

わたしは、小学校の二年生です。
いつも日曜日には、八はたの前田きよかしの日よう学校へ行っています。

うちじゆうみんまで行きます。

いつも先生方から、イエスさまのお話しをまわっています。
わたしは、たくさんのおともだちといっしょに、まんひかをうたったり、イエスさまのお話しをまわたりするのが、一番好きです。

このまえのきんげんは、

「わたしによびもとめよ、そうすれば、わたしはあなたにこたえる。」(エレミヤ三三・三)でした。

どんなにこまったことがあっても、どんなにいろいろなものかほしいときにも、何でもかみままだおりのりすると、かみよまは、かならずこたえて下さるといってお話ししました。

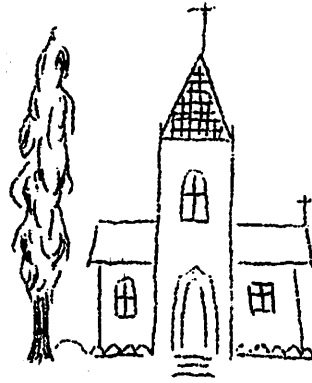
わたしは、いままで何かほしいものがあつたとき、いつもおあまんにせめて、おあまんをこらせさせてもらいました。それでこのお話しをまわいて、ほんとにうけな

と思いました。

これからは、何かみさまにおいのりして、みさまにすかれるよい子になりたいと思ひます。

それで、わたしはまだたくさんきんげんを、おぼえたいので、これからはいつも、日よう学校に行きたいとおもっています。そして、学校のおともだちにも、イエスマンのお話をして、まかせてあげたいとおもいます。

おゆり



日記断片

小羊 道人

「わが魂よ、まを譲りなすれ。 わがうちなる一
すべてのものよ、その聖なるみ名をほめよ。
わがたましいよ、まをほめよ。 そのすべての
めぐみよ心にためよ。」 (詩三三〇・一〜二)

x x x x x

一月一日 いろいろな出^身事^事が相次いで起つた昭和四十三年は、神の恵みなる恵みとその義しき右のみ手に支えられて、弱い者を助けていただいて、新しい年を迎えることができた。 靈にも肉にも今日あるは、ただ神の恵みによ

りてなり。
かくして主によつて輝く希望にみちた新春をむかえ、なくと感謝であらうか。

。 主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない。(哀歌三・二二)

。 わたしは初めであり、わたしは終りである。

わたしのほかに神はない。(イザヤ四四・六)

。 来て、神のみわざを見よ。(詩六六・五)

四十四年のために、この標旗を与えられ、元旦礼拝にはイザヤ四四・六の聖言で、はっきりと活ける主がアルパとなりイエスがなつて全責任を負つて、今年を導いて下さることを宣言されたので、もはや勝利である。

ゆっくりと三日間の新年聖会^会で恵まれて、本心に感謝と讚美である。 主にあって前進だ。

x x x x x

今年は、福岡の花田聖女^女姉^姉が揃つて聖会に初めから参り

まで出席され、恵まれた。

X X X X X X X

○月○日 この世のわずらわしい全々のゆきや、境
遇や、人や、物事一切から離れて、ただ一人、神と交わる
ことは実にこよなき幸いな生涯である。耳に入る雑音か
ら遠ざかり、静まって主のみ声をきくために懐き望むこと
は、われわれ信者にとって、最も大切な、貴重なるべき
ことである。われわれ人間は余りにも忙しく幼き過ぎま
、戦いに疲れ果て、肉體も魂も力が抜けてしまっている。
そこには、振り果てた自分の姿を見ることのできる。
しみじみと号泣することは我々にとって良いことではない。

主は、人々のために働かれた後は、山に野に、父なる神に
祈って交つておられたことを想い出すことである。主と
の交わりの時こそ、我々にとってすべての原動力となる。
しみじみと味いたいと思う。

X X X X X X X

○月○日 教会にタイプが購入された。説教プ
リントも週報もタイプに変わった。時件と共に老兵は去る
。かり版は姿を消す。やはり新鋭機械には追いつか
ない。かつてかり版と取り組んで印刷した時のことが思い
返ってきて、思い、楽しい思い出となってしまった。

思えば、随分「みぎわ」も移り変わって来たものである。

そこで、「ぶどうの木」オ三号に書かれた、「みぎわ」騒動
記にも、更に新しい一ページをつけ加えねばなるまい。

別れは淋しいが、もう一つ大きく成長することなら、喜ぶ
べきだ。本当に感謝々々。

「みぎわ」は去年の十一月十日号から、説教フリントは
黙示録から変貌した。

X X X X X X X

二月十三日 林正二郎兄姉に、男児を今えられ
た。兼弟が安産で何より感謝。

X X X X X X X

二月二十三日 山口信愛教会牧師林健三師の司式に
て、榎本俊雄兄と卯子姉の結婚式が行われた。カサの婚
庭に祝福なし給った主の臨在のもと、参列者も教会関係は
勿論、会社関係や同窓生多数で、天候も祝され、披露宴も
賑やかで主の祝福に満ちた二人の姿は、幸福そのもので
あった。榎本先生ご夫妻もお疲れではあったにしろ、
お顔には、お喜みがこぼれていた。心から二人の幸せに
よいよ恵み望むかと祈る。

X X X X X X X

四月四日

主の記念すべき十字架受難の日であ

る。いま一度新しく主の吉しみを思う。

今日から、福岡大塚公園教会で聖会が持たれ、松岡忠次郎先生がご用に当られる。八幡からも志岐兄、高木兄、正野賢子姉、調徳子姉、下松洋子姉、野村夫妻など大勢で出席して恵された。ガラテヤ四章で、神の子の身分について、四回も同じ所で講られた。

X X X X X X

五月〇日

・ 霧しけき、道ぎのぼりて 今日とまた

祈ればめぐみ いやよこぼるる

・ 雑音を ぬりのがれて みまきく

静けさ朝の 美はしく光る

・ 静まりて 我の神たる 主を知れと

のたもつち又の み手にまされ

・ 今日あるは 神のあわれみ 賜物ぞ

けに我になし 我にあらざり

X X X X X X

六月五日

毎週読いた黙示録(本國會)も今日で終る。来週からはヨハネ福音書である。

X X X X X X

六月二十二日

西原又江姉が主の導きにより、

カナダ(バンクーバー)に留学されることになり、礼拝後に教送会が行なわれた。お茶とお菓子で幸いな時を与えられた。文江姉のために、いつかの留学費用をまがぐなえ給い、さらに真理について勉学を進め、深められることは、本当に感謝である。また神は姉妹のために、結婚の相手(李牧師)もさなえられ、共に留学(トロント)に

れ、将来は故国の伝道という使命に立つて行かれるようにまでなす給うたことは、何たる神の愛のみ業であろうか。本当に主を慕めずにはおられない。いよいよ二人の前途に溢るる恵みと祝福とを、心よりお祈りする。

二十三日、小倉発つばめで出発された。お母さんとご一緒には……。

X X X X X X

六月三十日 今年も半年の旅路、随分と出来事

があり、巷には恐ろしいことばかりである中を、霊肉共に

弱い者が今日まで年頭のメッセージのとおりに憐れみとい

つくしみの主に助けられてきた。

「エホバは此まで我々を助け給えり」としみじみ実感として覚える。夜おそく家族と共に、主に感謝を捧げた。

。――。――。

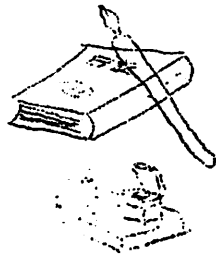
信徒会に出て、また新たにこの貴い福音に手かり度ばれ

各された自分の幸いを痛切に感じた。福音にありざるものが福音であるかの如く、多くの人々の中に伝えられ、受けられていることは悲しむべきだ。此の眼が開かれ、十字架の福音の真理がはっきりと聖霊によって示され、正しく受入れられるように祈る。また同時に、この貴い生涯に算かれている前因教会は、大いに感謝を忘れてはならない。

「この後は、これがためならで、己に代つて死んで、救ったお方のために、世を過すべきである。」

(コリント②五・一五)

X X X X X X X



七月一日 感謝がまた加わることは嬉しい。永らく祈っていた榎本先生

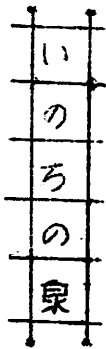
先づ夫人の足のお痛みがすっかり癒されて、元気になられたことである。二週間余りの旅行(名古屋の榎本先生ご訪問)から帰られ、完全にいやされたことを感謝されていた。「永く忍ぶことも、遂に救われらんや」の聖言を思い、大感謝である。ハレルヤ!

X X X X X X X

榎本先生は今年夏暑熱のお峠で、教会創立以來三十三年の

間のご用、實際にさまざま困難の中に聖言だけで勝利をもちつて今日を迎えられた。

健康にもすこぶる恵まれて、大塚公園教会の新港先生のご写天後、同教会の代書者として、オ三日曜日(礼拝のご用)き毎月続けられ、六月からは毎週火曜の午後一時半と午後六時半の二回の集會をも持たれるようになった。なおその集會の間は、朝から信者一般の人々の相談と同想のため、一日を祈りとご用に当てられるなど全く多忙な中にある。今日まで祝福の手により用いたもつたまが、さらに今後とも、いよいよみ業を救わしてくださることを祈する。先生ご夫妻のうえに、豊かに溢るる祝福を……!!



M S 生

聖日礼拝に出席して、最初に受付でいただくお紙の紙片、それは「みざわ」と呼ばれる聖報である。

先聖のお祈りの中から誕生した「みざわ」、私はこれに何如の慰力を感ずる。この一枚をいただくために礼拝に

に出席するといえは、大袈裟に聞えるが、何となく心ひかれ、手にするのが楽しみである。丁度、信仰誌「百万人の福音」と同じように。

この小さな一枚の週報が御堂に尊かれ、祈りの中にあつて作成され、礼拝出席の一人一人に配布される。そして感謝と讃美をもつて捧げられた礼拝記録となることを思えば、粗末な取扱いはできない。その中に刻まれた「孝」の一枚が、私共信仰生活の歩みであり、また「みぎわ」の一枚が、前田教会の「父」の流れをなしている。その「コマ」に兄弟姉妹の信仰の戦いが惚はれ、御堂に迫られて祈りへと導かれる。今では「みぎわ袋」なるものまでこしらえて、日付帳に大切に保存している。

数年前のことだが、ある日のこと、家持すべく冥想して示されたのが、この週報である。週報の日付帳に「うしろ」の礼拝記録ノートを取り出し、感謝のうちに聖書を学び、家持を捧げた。

「すべての慈愛、今は喜ばしと見え、ひえつて悲しと見ゆ。」(ヘブル二・一二)あの慈愛、苦しみの中であつて、悲しみの慈愛がさまざま、もはや海中の藻屑とならうとした。その時主イエスは、悲嘆にくれる小羊の牧者となつて、聖手をもつて導かれ、緑の牧場で休息を与え、いのち

の水の泉へと伴ない給うた。そこにはもはや目に涙なく、「汝われと共にいませばなり」と平安と力に満ちて、万軍のエホバと共に憐れみの勝利を覚えた。

「エホバはわが牧者なり、われ乏しきことあらじ。エホバは我をみどりの野に臥させ

いこいのみぎわに伴ない給もつ。」(詩二三・一二)
私達の週報「みぎわ」に、神の祝福が豊かにありますように……。

「俳句」

正野義雄

- 。 孫の重さ、老梅しぐれや 妻の留守
- 。 雪野雨 今日昼 いずかたに
- 。 子は長けて 羽の節度の化粧びん
- 。 むらすぐぬ 竹春にかえりたり 萩の雨
- 。 梅二月 月に三度の 子に懐り

「俳句」

正野貞子

- 鯉のぼり 真鍮鉢の 氷く空
- のぼり字 数キロかつぎて 親心
- 舌儿して 作りしのぼり 子は見らさ
- 来るたびに 春の成長 夏草
- 草むしり 終ることなき 日課のな
- 應呼する 斯長歌や シェット機の飛い
- 四十度 越えて例なき 暑さかな
- 竹林の 凡にゆうぐ すたれかな
- 孫の来て 日課を狂う ひなた水
- 行水も あひせて出産の 時思う
- 大人たち 小さい孫に 白の暮るる
- 母親は おやつやるたび 祈りさせ
- 孫の合掌 見たさにケーキ 買いまむ
- 孫の誕生 三輪車持つ手に 汗流る
- 三輪車 孫の乗る日や 蝉の鳴く
- 聖会に 行きて富士五湖 雲ながる
- 夏の族 贈り物にて 恵まるる



入信のあかし

大野孝太郎

「酒に酔うな、草葉はどの中にある、

むしろ御堂に福されよ」 (エマソ五・一八)

眞ま聖名の風りなき愛の御血汐を染め、感謝講美いたし
ます。

私は、大正九年十月二七日に大蔵市元泉尾教会の門の中
に迷い込みまして救われしました。二十二年の青年の時で
した。

最初に掲げた聖言は、私にとって忘れぬことができませ
ん。そしてまた、この聖言を信じた故に、終始一貫、勝
利を得ました。

この日は私にとりまして、最も嬉しい記念日でございます
した。皆様にはご承知のごとく、私は建築の大人工ですが
、私が初めて家を建てた喜びの記念日でございます。

家と申しましたが、小さい鉄工所のトタン屋根のバラック
でございます。それでも先方には大切な家ですから、
大奮こびでした。昔は上棟式には、よくお酒や二瓶定を
出してくれますが、お酒の飲めない私は、そのたびに困っ
ていました。丁度、この家は人夫の親方様の知り合いの

家で「大勢はお酒をひとしづくも飲みません。」と伝えて下さりましたので、当日はミリン三合「これは大勢さんの分ですよ」と言われしました。これなれば、だれでも女の方でも飲むのです。それで皆様がお酒を飲んでいる間、私はお話しを聞きながら、お湯呑いっぱいいただきました。ところが親方さんが、このおめでたい日に一杯では元が悪い、二杯は飲むべきだと進められましたので、長い時間がかかってとうとう二杯飲みました。

聯さかけている間は何事もありませんでしたが、やがてマユならと皆んな立ち上りました時は、大勢は西の方にもだ一間もありますのに、私の目がくらんでしまいました。そして真暗くなりまして、足元が平地を歩いているのに波の上を歩いているようで、歩くことができませんでした。門から外に出るとすぐに、ここで少し休ませて下さい、と聲がよびました。すると「それはいかん、こんな所に接たなれば、おめでたい日に元が悪い」と私の耳の中へ小さい声を入れて下さって、あっちまで行こうと私の手を肩にかけて、半道ほどの道を家の近くまで連れて行って下さいました。

後で聞いた話ですが、お酒よりミリンの方が強く酔うのだそうで、大笑いでございました。しかもこの大勢が

私の一生の勝利となりました。

家に帰るなり、すぐ横になりましてチヨツトとうとうと眠りましたよつです。目がさめると、母に「今日は先方で二晩走もご夜儀もいただいたから、お芝居が活動も真でも見て来ましようか」と尋ねると「どうしなさい」と言つて下さいましたので、嬉しい思いで出かけました。

この時、陸軍にも乗りませんが、歩いて行ったことが幸いの一つとも言えましよう。神様はこのようにして、導いて下さいました。

教会の前を通りかゝりますと、中から讚美歌のお音が聞えてきますので、私はハツと立ち止まりました。いって仕事に行く道ですから、往復その前を通っているのに、見向きもせず、気もつきません。ところがその晩は不思議に袖襟を濡らす本音が、耳の邊に私に聞えてきたのです。前日教会と同じように道路から入り込んでいますが、よく見憶えていましたので、ツカツカくと教会の玄関まで歩いてゆきました。集会が始まっていました。なれば一人の婦人の方が出て来て、二親切にお入りなさいといつて下さいました。私はこの時、キリストのキの字も知らない時でしたので、「はい、ありがとうございませす。ここは何をするところでしようか。」とお尋ね致し

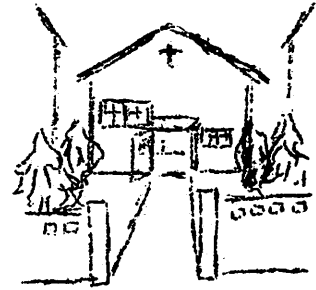
ました。なれば「キリスト教会です。神様を礼拝し、お話しを聞くところです。」

「誰れでも入れますぞうしょうか。」

「はい、どなたでもはいれますよ。」

「あ、そうでございますか。」

私は今晚テヨットお寮に行つておりますので、またこの次に寄せていただきます。」と帰りののると、「テヨットお寮ろ下さい。」その方は牧師先生に取りつづかれたので、佐野先生は去閑までおいて下さいまして「お上りなさい。」



「はい、ありがとうございます。」私は今いったように申しますと、石段三段を一段降りてまゝ、手を伸ばし、「一言目に私の手を捧げて、おき上げて下さいました。そしてそのおは、会堂の一番前の席まで引っぱつてきて、椅子にかけさせて下さいました。」

その時の説教が、最初にあげた、「酒に酔わない、交遊はその中にあり、むしろ御堂に満ちれよ。」(エペソ五・十八)でした。

私は実に驚き入りしました。永い間求めてくゝきたところは、ここだと思ひました。お説教が終つて、皆さんお神様、神様といつてお祈りを捧げておられますので、私

はテヨット不思議に思ひました。この教会は幼稚園の保育室が三つあります。それ故、まづとあのやを叩けると神様をお祭りしてあるにちがひないと思ひました。なれば、私は二十三才まで他の神々に熱心にお参りをしてきたのであります。ことに熱心に行きましたのは、イナリさんで、その先生に頼つて病人を助けてあげるつもりでござりました。

父が天父に召されてから十年間、実に大きな損失をしたものだと思ひました。お話しを聞いてるうちに、お酒の酔いが覚めてしまひました。

オニの聖言はヨハネ一四・一・六でした。
「あなたがたは心を騒がせないがよい。
神を信じ、またわたしの信になさい。」(二節)

このところを教えられました時、私は驚き入りしました。これはまた素晴らしい。私の父の遺言はここに書いてあると云つて、聖言はここから読み始めました。

私の父は大正二年一月十六日朝天父に召されました。この時私は十三才でした。その前日の十五日朝、家の者全部呼び寄せて、私と次の弟の手を合わせ、真中を父が捧つて、兄弟は仲良くすることと忘れてはならない。父は私に、お前は兄弟がから弟を見てやつてくれ、弟は、兄の

いふときよく守れよ、母のいうことをよく聞きなさい。父は謙遜に同じ言葉を遺言しました。最後にもう一度私の手を握り、お前は何かの町へ行つても、神様を信じてゆけと言つて下さいました。父は確かに、長男である私が發育おくれで、一人前の人間にはなれないこと、日頃から不問に思つて下さつたに違ひありません。父は自分が言された後は、母も子供も心懸くであらうと心の中に思つていたに違ひありません。それゆゑ父は真心こめて、もう一度手をかしまさい、心配せんども神様を信じてゆけと言われたのでしよう。そのときは神の力のまじりませんでしたが、確かに遺言は本人が言された後で後立つものでございます。この時のお教誨は、頭のとっぺんから足のつま先まで、指先が入つたような感じが致しました。神様は私に、父の口を通して生ける真の神様を敬えて下さつたのだと悟りました。

こうして私は神様の救いを受けました。今、神様の恵みを語りますとまた、私はロリント②十二章六、七節を思い起します。使徒パウロは、高慢にならないうちに肉體に一つのトゲが与えられたと申しています。私には一つのトゲではありません、三つも四つも与えられています。このトゲゆゑに神様に立ち帰ることを

ができたのだと思ひます。それですかうパウロと同じように、私は自分の弱さを誇らう。だから、私はキリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時にこそ私は強いからである。」(九、十節)

その後、私は不思議な神様に導かれて、昭和三十三年二月六日、大阪より九州八幡の地におもむきました。

八幡前日教会における六年間、本当には神様にあせつたになりました。この間私の信條に詩を入れて下さり、その後も絶えずお祈りをして下さいますから、私達は今こうして神様のあわれみによつていますこと感謝にたえません。これみまは生きていらっしゃることに、確信に確信が与えられ、御霊と一つになるとき無限の愛と無限の知恵、無限の能力をもつて主のみ業は働きたもう。それは限られた紙面には到底書きつくせぬほど、多くの奇しき素晴らしい出書物の遺蹟でありました。神様にあって多くの兄弟様が私達のためにお祈り下さいます、真に実に主のみ業は身に覚ええました。

六年の後、大阪へ帰りますとき、私は牧師宅で櫻本先生百合子嬢様、咲子お嬢さんと三人がおりてお話しをなさる作つて下さり、それとどうでなく、ワイシャツや下ズボンまで

洗つて下さりまして、あまりにももったいないことでは
ないか。

この前夜は、高木先生をヘッフラン会の皆様がお集まり
下さりまして、うれしい思ひでいっぱいでした。
これみな榎本先生お二方はじめ高木先生お二方様のご指導
の賜物と信じております。 サフラン会の皆様には、お忙
しいにわかかわりませぬ、ご遠方の処、お集り下さりまし
た。 さらに、真心からなる贈物をいただきました。主に
よって皆様のご愛情にて私を慰めていただきましたことは
、今日までくり返し、
高木先生からは大型聖書、愛慕歌を賜りまして、そし
て諸聖歌を聖書を賜わり、平当にうれしい思ひでござい
ました。 私も愛歌五一三番を皆様と一緒に歌わ
せていただきました。

最後に、御教会と皆様のうえに主イエス様の豊かなる恩
恵の注がれますようお祈り申し上げます。

ふどつの本を通して、皆様と語り合ひ、祈り合ひ、助け
合うこと許されまして、うれしゅうござります。

短歌

榎 平 利 三 郎

○ 紫石の 山ふところに うぐいす啼き

いで湯の宿の 夜は明けゆく

○ 五月晴れ 緑したたる 紫石に

白ゆもすひびく 頬白の声

○ はるばると 山ふところの 紫石に

たづねてうれし 野鳥の舌さく

○ しじまなる いでゆの 御座に 聖書読めば

わが主の聖声 さやかにひびく

○ 日は落ちて 凡はたやみて しじまなる

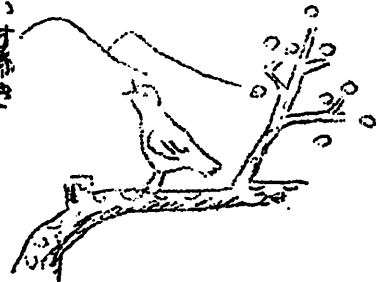
蘇鉄の陰にて 祈るうれしさ

○ あかぬさす 朝日に映ゆる 窓近く

うぐいす啼きぬ 紫石の宿

○ 芝生にて ゆく夜空に 月かなし

アポロ廻りて 夢も消えゆく



。 見上ぐれば 吸いとまるゝが 夜の空

。 星屋の さわのきらめき

。 おこたらず 手入れとどまじ 塵もなる

。 松の板ぶり 妙にうるわし

。 ころころと 蛙啼くなり 柴石の

。 いでゆの宿に 夜の更けゆく

。 柴石の 夜のしじまに 啼く蛙

。 はるかにしのぶ ふるさとの 峠道

。 雨降れと 騒ぐ蛙の 声たかく

。 風はた止みて 汗のじもも

。 みどりなす 木の間を縫いて 吹き抜ける

。 風いと日し 柴石の宿

柴石ハレルヤ

のぶ 生

最終の下り列車だろう、遠くて墓園が消えてゆく。

物音ひとつしなな静寂な夜、帰宅して一息つくこと、深更の

静けさに柱時計の刻む音がいやに耳につく。 聖書、讃美

歌、ノート、その他をカバンに入れて、礼拝出席の用意万

端を整える。 明白はひと周りの旅路のスタート聖日であ

る。 あわれみを受け、また悲みにあずかつて、時刻を得

た助けを受けようと御堂に迫られ、時、礼拝を前にして、

自ら感謝と讃美がわいてくる。 一日の疲れを覚えて一夜

の夢路をたどる魂のうえに、主は愛の御手をもつて平安な

眠りへと導いて下さる。 ハレルヤノ

「われ安らかに臥し、またぬぶらん

エホバよ、われをひとりにて

たいらかにおらしむるは女なり」（詩四・八）

聖日の朝、平日と違って変らぬ慌ただしい朝のひと時、

兼用のため静まって祈る時間を見い出せぬことがしばしば

である。 一列車おくれたらもう礼拝には確実に遅刻。

戸締り、時には朝食の後片づけを要領よくやらぬと、駅ま

でかけ足である。 雪のちらつく寒い冬は走るのも良いが

、日さしの強い夏ともなれば汗はんでくる。 そのため、

最近ではもっぱら列車の中で祈ることが多くなった。

車内は騒音で祈れないだろうと思っていたが、この時間は

案外に着着くことができる。 主との交わりが楽しく、美

に感謝である。 切に主を知ろうと祈って礼拝に臨むとき

、御堂による大いなる喜び、主のあふるる恵みが与えら

れる。

「切にエホバを知ることこそ求むべし

エホバはあしたの光の如く必ず現れいで

冬の雨の如く我らに降み

春の雨のごとく世を潤し給う(ホセア六・三)

今朝の聖日礼拝の聖きは何だらう。

生命の道が示されるエホバの聖言に、大きな希望をいだいて悲痛する。 集会に行こうにも思うようにならなかった

あの悲難、苦しみの跡を思い、今にして恵みの御座にはばからず、近づける自分の境遇に自ら感謝がわいてくる。

聖言に養われ、御霊に導かれる信仰の歩みがいかに幸いであるか。(詩三四・八) そこに主の豊かな祝福を覚える

今日この頃である。

かつてはこの世のよろもろの悪の盡力の下に支配されて肉の故、眼の故、持物の誇りなどに心を奪われていたが、

その昔き身分(ヨハネの二・一五―一六)から解放された今、従えずエホバを前におき、右において神の義を讃美する

信仰の歩みが、いかにすばらしいものであるか、主の御前にあるよろもろの楽しみを味わいつつ、勝利の日々を御

愛に導かれます。 ハレルヤ、ハレルヤ、

「汝、生命の道をわれに示し給ゆん

汝のみ前には立ち足れる歡喜あり

汝の右にはよろもろの快樂とししえにあり」

(詩一六・一二)

われはただ エヌを信じ

よろこび かぎりなし

一番楽しい時間

伊規須 太郎

子供たちがやってくる

寝ぼけた子、仕立直しに来たよつな子もある

しかし、皆、神から祝ご中た

大切な子供たちだ

一週に一度、ゆずが三十分間のお話し

帰えりに一言でも声をかけようと考えながら

感だそれもてきないで別れる子もある

しかし、この時間が私にとって最も楽しい時だ

この一週間、この子供のために祈ろう



納骨堂

お骨をくが記念窓にすぎないと思っても

東御の近くを通ると納骨堂の気にかゝる

父と母とぞして祖母たちのアルバムを作つて納めよう

もし、わたしが死ななかつたら

誰のひきかえにでも生きてくれるのもしれない
わたしの写真に添えて何と書いておいてくれるだろうか

ある母親からの手紙

榎本利三郎

(その一)

毎日賑かにお便りありがとうございます。

先生の二家族の首飾がお元氣な孫子なめて安心は致しま
したが、余り受つてしまわれたので、淋しくてなりません
。八幡へ行ったら、先生にあれもこれも話してみようと思
っているのですが、先生の顔を見てたら、話すことは何
もなくなつてしまいます。

私たちは、みな元氣です。

一ヶ月ほど前、近頃の奥さんと「女は子供を育てること
に夢中は何も考えず、何しせずに半生を送るけれど、子供
が大きくなつて、お母さんとも言わなくなつたら、一体何
が残るのだろうか」といふ話をしました。その時、何の

話から教会の話が出て、真剣に探しました。

教会はないが、救世軍は開かれていた。救世軍は
賛美の、長老はくは女園で、某会はなくなつてしま
いました。その裏会に出たおった人の名を聞いて、尋ねて
みると、幸外、私の母と母に同僚の姉妹たちが沢山あり
ました。

子供の病氣で死んでしまつたんだ葬屋さんの奥さんと、
味増さんと毎日のように顔を会わせる諸式屋さんも、手紙
を出す時訪れる郵便局の……と、ここにも、彼だにも身
近かなあたりの姉妹たちがおりました。

自分で自分の心の戸を堅く閉じておりました。本当に
主以外から方を叩いていらつしやる。私がかます開けなけ
れば、隣にいる友を認めることもできない。私の目は、
こともとて一瞥ではなけりけれど、心の目はもつと意のつた
とに気づき、本當の意味で目の覚めた思ひです。
私はいつも自分の心のふるさとのように、前田教会を思い
出しながら、毎日を暮らしています。

(その二)

今日が最後の葬儀で、はつとしております。

手術の跡が全癒わからなくなるとは、一年くらい後だぞうです。 あんなに気が弱く、小さな注射でも恐がる子供、二三日前キョット口唇のところを鉛筆で突いて少しばかり血が出て、びくくりするような大声で泣いた子供、私は無事手術をしてくれるかと案じておりました。 手術の時には、本当に奇跡のようにベットの上って手術が終るまでの四十分間、おとなしくしておりました。「済んだよ」と言われて帰るときには「ありがたうございました。」と申しておりました。

手術をすることが決つてからは、このことが私の祈りの課題となりました。 これは人に頼るわけにもいかず、ただただ祈っているばかりでしたが、すべてを造り、すべてを支配したもう神様は、確かに依り頼む者には真実をもつて示したもうことを教えられました。

子供の小さい時は心配と不安で、祈りはしましたが、自分の努力で何とかしようとして懸命でした。 学校に入つてからは、先生に依り頼んでいました。

聖書に「だれでも小たりの主人に兼ね仕えることはできない。 一方を憎んで他を愛し、あるいは一方に親しくて地方きうとんじるからである。 あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない。」(マタイ六・二四)

とあります。 親も神様から造られたものです。 子供も自分の思うようにならないのが当たり前です。 人は一生懸命あせりますが、結局神様の御旨だけが成り立ちます。 人や自分の力に頼っていても、それには限度があることを教えられて感謝しています。

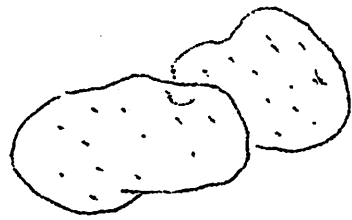
子供の将来についても、一生懸命神様に祈って依り頼んでおれば、神様が一番良い道を開いて下さるから心配することはない、と申しております。 人に頼って手えられる喜びは、果して本当の喜びであるかどうか、私は疑問に思うようになりました。 また不必要に気をつかい寝れません。 神様に祈りながら、神のみ前に生かす時、本当の平安があります。 いろいろ廻り道をして、いろいろな段々を経て神様が教えて下さったのだと感謝しております。 またすべての創造者であり、生も死も自由に支配し給う神に依り頼んで、これからは進みたく頼っています。



詩「新じゃが」

正野 勇子

手のしびれるような 寒い日
 荒地を掘って ちやびいも植えた
 やびて芽が出 葉が茂り
 花も 白花と咲き揃った
 人の榮草も花のごときか
 すべてのものは 掘ぎてゆく
 地上のものは 失せ去れど
 かくれしところに命あり
 捨てて仕きるの たとえの如く
 見よ新創造の 神の力を
 掘る鍬先に しゆまつなま
 思わず 讚美と喚声
 いつの間に実ったが 新じゃが
 六十倍 いや百倍かもしれぬ
 偉大なる力のまよ
 草木にさえずと ひく惹む
 公れば わびルの新田を



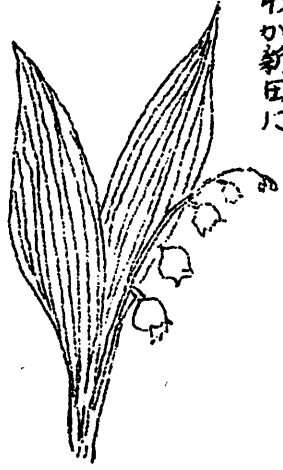
深く深く 掘りましよう
 雑草生えたら 板ましよう
 虫がわいたら 虫もとろう
 愛の光で すくすくと
 突らせたまえ わが新田に

詩

「罪、悔い改めよう」

松永 和子

罪、悔い改めよう
 イエスさまにより
 あなたも救われる
 わたしも救われた
 罪、悔い改めよう
 今、すぐに
 明日では遅すぎる



早く 早く 早く

罪つてあなたを知っていますか
罪深い、罪のように悪いのですよ
けれど、けれど願白くになりますよ
善のように

あなたは悪い方がお好きですか
いいえ いいえ
白い方がお好きですか
まっとう

罪、悔い改めよう
今、すぐに

「イエスを信じてください」

イエスを信じてください
イエスを信じてください

あなたの罪は許されて

善のように白く

罪人になりますよ

イエスを信じてください

イエスを信じてください

愛の雲を取り去られ

澄んだ心になりますよ

イエスを信じてください

イエスを信じてください

信じて従う心あれば

あなたの人生はすばらしくなりますよ

「ゆだねましょう」

ゆだねましょう あの方に

わたしにはなく イエスママに

十字架がかかりし イエスママに

今も生きていらっしゃる イエスママに

あなたも わたしも

きみも ぼくも

みんな みんなゆだねましょう

「イエスさまはおっしゃった」

イエスさまはおっしゃった
大人になれは

信じてることがむつかしい

トマスのように疑い深くなる

幼児のように

素直な心で信じましょうと

イエスさまはおっしゃった

泣き虫 泣き虫 わたしでも

イエスさまは いつでも 何時でも

招いて下さった

私のところに来なさい

重荷を取ってあげよう

イエスさま 背中の重荷は

重くて重くて 歩くのに大変です

早く取って下さい

イエスさまは まだおっしゃった

きびしいお声で

私を愛して従ってこなければ

重荷を下してあげられない

み言葉 守りますか

いましめ 守りますか

はい イエスさま

強くなれるのでしたら

あなたに御側について下さるのでしたら

さうと さうと

日	日	こ	れ	感	謝
---	---	---	---	---	---

岡崎ミヨ子

「常によろこべ

絶えず祈れ

すべてのこと感謝せよ」 (テサロニケの五・二六―二八)

茶の間にかけられたこの聖句は、私がこの団地に移ったとき、婦人会の皆さんからいただいた聖書の額である。

。初めのうちは少々抵抗を感じたが、この頃では日々感謝の祈りをささげる身となった。

「常に喜べ」 本当にそうだ。

神へのあがめでおれ

は、良きと思しきことを喜ぶのだ。 否、生かされている

だけでも大いなる喜びである。

表は間の取柄から家庭の主婦に帰った私は、すべてが新しい経験である。先づ手始めに毎日の食事の世話、献立、第物、惠付、番付と調和されたしかも茶番物と物柄のバランスも考えてみなければならぬ。テレビの料理の時間があっただけ事を釘づけにしたことか……。そして、料理のコツを少しづつ覚えてゆく楽しさ、私のみに与えられた特赦めようで、誇りにも思える。

また神様は、私に衣料の更衣の知恵を授けて下さった。それは三十年前、私が八幡で教職が決ったときあつらえた特である。大さい十五円出した細のサートの袴、十年着たまは茶箱の中に眠らせてあった。常々何かか更衣してみようと置いていたが、そのヒマがなかった。その袴を取り出して、アンサンブルを作ってみた。

自分で作った洋服、早速着て主人に見せた。すると、「ニコニコしながら見てくれた主人が「車夫のようだ」と言った。兩一應、まさにその通りだ。私はしゃつだったので、茶室に引込んで考えた。「何かいい知恵をかして下さい」と心の中で祈りながら……。するとふっとひらめいたことがあつたので、さっそく端切袋から取り出したブルーと白の縞の布、これを斜めのテープにして袷な

しの袴つうの少しのぞかせたら、何と素敵なニコースヌイルではないか。私はまるで少女のように、胸のおどろきを覚えた。今度はそつと脱いで衣紋字に通しておいたら、主人が見て一語に喜こんでくれた。これまた感謝。先週の日曜日、私は丸庵子ヨットクラブ教会へ出かけようとして、取っておきの巾着を出そうとしたらない。オヤツと探しまわったが、いくどと探したがやはりない。時間は容赦なく迫る。「神様、早く出して下さい。」と子供のような泣かんばかりになつた。ふと聖書の中だと思ひ出し、巾着はつまみ縫いペーパーをめぐった。しかしなかりつた。半ばあきらめて、教会へ行こうと洋服箱を出そうとしたら、何と箱と壁の間からビニールの袋が出てきたではないか。どうも紙につままれた感じで中を見たらあるある、破かに肉と通脹があつた。私はホツとした。そして「神様ありがとうございます」と静かに感謝した。

それから一週間、私はしみじみ神の愛を感じながら、ミシンを踏んでいる。お布団の作りかえ、古いシーツの更生と仕事かドントンはかどつてとてもううれしい。

主人は菊の植付け、朝顔の植えなおしなど度の手入れで実に楽しそつだ。そして私が出す十時と三時のお茶を、

とても美味しそうに飲んでくれる。日よしのよい朝の
教務側に陣かけて茶を喫する若老夫婦は逸びれたる哉。
しかし私たち二人の過去は、務魂との戦いの連続だった。
けれどその都度、神さまがめて救われた。だから私たち
は世の光となって、皆々入るようになるには世助さまがはな
い。この町内で生活年令の一番高に私たち二人は責任重
大だ。だから、ただ主の愛したすべり、聖言に一步でも近
づくよう助まねばならぬ。

愛は寛容であり

愛は悟け深い (コリントの二・三・四)

本当にこの聖書のやうに寛容で悟けのあま入固となって
この町内を歩み歩くならば、救めてゆけよう。

おみよと主にたより

主を頼みとする人は幸いである

彼は水のはとりに植えた木のやうで

その根を川にのほし

着るに会つても恐れれることはな

(エレミヤ一七・五・六)

絶えず愛を待たぬことを信じて前進しよう。 神のお召し
のある日まで……

うべ、我々まゆづりを得たるかな(一)

伊 現 須 茶 子

昭和三八年二月九日、神様との交わりに入つていった
私のこれまでの道を語りためておこうと決心し、一冊のノ
ートに記し始めた。途中とまれとまれだが、ある程度流
れていくのを私の証として投稿しようと思ひ立った。
ひぐり書きたるのまは書き移すことにする。

はじめに。

教会へ行きはじめてから十二年経つた。これまでを
なまなかでの歩みがあった。日がたろ年の過ぎると、感
激も悦びも、そして苦しみも少しづつ忘れてくる。
あ、ゆうこともあったつけ……でも何時だったかしら？
想い出さうとしてもほやけるものが多い。もし二十年三
十年先になつたらさつと、もつと忘れていくだろう。そ
の時の思ふ、感覚をはっきり書きあらわせばよいと思ひつけ
と、どうゆつ過ぎたか……たのき書くとめたらと思ひ立った
。 今日までのことを書いたら、その光は信仰の日業にな

つてよい。ト手に書こう、傳紙はどうしようなど考へたら書けなくなる。ともかくノートを糊いて、想い出の糸をたぐりながら書いていつてみよう。時期や書柄の前後と起つてくるだろうが、それでよい。主の御前に立つ前に読み返して、その生涯を感謝することができるだろうが。

(昭和三八年二月一九日)

教会に行く前

昭和二十五年、大分県立四日市高校を卒業した。私の卒業と父の丘高退職が同時であるため、希望であった進学も諦めねばならなかった。姉は女学校から女子大へ、兄は中学から工專へ、弟も男だから大学まで行くことは決っていた。私だけが新制の高校で止めねばならぬことは大いに不満であった。

さて、私に就くてもよい私は田舎にいて、百姓仕事と婦人会の習字引き受けで忙がしかった母に代つての家事のみであった。たまらない毎日だった。下手の機好きだった詩や文を書いては、学生雑誌「いすみ」という本に投稿するのが、うちの慰めであった。

紅梅の咲く三月から、たんたん陽がうつらうかになつてくる。庭は紅蔭い散花、白い雪柳、菜の花の姿と自然が

美しく暮つてくる。陽だまりにゴサを敷き、心ゆくまで大自然にひたりながら、何が書き、読むことで心の空虚を埋めていくような日々であった。



じめじめした梅雨、ぬかるみの田舎道そして身も心も空なるような困難の芳切。夏の日照りのたんぼの草取り、麦まさき、稲刈り、農繁期には自分を忘れざるを得ない生活だった。

友はなかった。戦後、疎開していた人々の寄り集まりだったウラスの友は、ほとんど卒業と同時に教会へ帰っていった。青年団の集りに出席してみても打ち込むほどのことも見い出せず、また私の性格がそれらの人々との交わりを望まなかつた。この頃、私の心には何かを求める切なる願いが起っていた。自分の力の限界は知っていた。文学と魂の救いにはならなかつた。精一杯背伸びしても、それはその先へ遠ざかっていた。

こうゆうある日、私は友人と中津へ映画を見に行った。イングリット・バーグマンの「ジャマンヌ・ダーク」だった。何ということなしに見ていたこの映画に心打たれ、繰り返し見たことを覚えてる。オルレアンの少女がフランスの危機に、荒れ果てた教会でお祈りを捧げている敬虔

な祭が、心にやまづいてしまった。神の命令による不思議な力を得て、戦場で指揮する少女。現実とは思われなかったが、この中に流れている信仰の力というの、そうゆうものに魅せられてしまった。

この原田舎で行なわれる「青原講」とか「社日様」とか、またお寺での説教といふたたび聞いた。それは新聞の三面記事を読んでいるように、瞬間過ぎには面白かったが、求める心に答えを尋ねてはくれなかった。神社に参っても納得するものはなかった。こうゆう此の部分があったため、シヤンヌ・ワーフのキリスト教の神にふれたとき、これは違う。何ががあると思じたのだろうか。

しかしこのゆう気持を持っていても、近くには求める教典がなく、一冊あった新約聖書を開いてみても、カタカナばかりの名前では読む気もせず、たゞ日が過ぎていくだけであった。

百草詢の春から夏に梅雨の中、田植え仕事に疲れたれ灼熱の太陽の裏がやってくる頃、ガム・ヤウに田の草取りに這いまわる。一反さこす広い田んぼに一人て除草機を押し、さわやかな秋の匂いに心するゆとりもなく稲の収穫、ホトとする間もよくまき播きが行っている。冬には神社の表参み、そして正月を迎える。一体私はこれから先ど

うなるのだろうか。何年かこのゆう生活を送り迎え、やがて歳いでいくのだろうか。それではあまりにもみじめすぎる。心は焦り、たがわなくなった。今にも自分の身が駄目になりたびてしまうのではないだろうか。十八、十九才頃の感情は自分で処理できるものではないかった。

考える力が失われていくのではないだろうか。このままでは大人と同じように嘘の中き、不真実の中を歩むようになるのではないだろうか。何を求めたらよいのだろうか。本を讀いたくても収入のない私、しかも田舎にいる私にどうすることができたであろうか。

年が明けた頃、私のここのゆう気持を見通してか、嫁いで近くの村で薬局を開いている姉が大学に行かせてくるといふ。暗闇の中に一途の光、とび上って喜んだ。さぞく本を借り集め、勉強が始まった。この頃は新制大学ができたのホヤホヤで入学もやさしかった。四倍位の競争率の熊本女子大文学部を選び、難書も取り寄せた。二、三ヶ月の勉強でもあまりあやふやな気持のなにはどのんびりした頃であった。人間、目標を持ってしていることは楽しく、希望あるものである。ぜひとんと働んでいた。しかし有楽天になつていゝ私を、一打に打ちのめしてしまふことが起つた。「他人の世話になつてまで大学に行か

なくともよい」という母の言葉。ギリギリしていた私は、どうしても行かせて欲しいと頼もうとせず、それならよい、と顔面を目の前で引き裂き、家ごとひ出した。

人通りの少ないのを幸い、田舎道をワンワン泣きながら歩きました。思考力を失った頭に最初に聴えたのは、自殺だった。しがし感情に走っているけれど自殺はできないものである。考えつづけたとき、もう理性が戻ってきていた。ゴウゴウと流れる橋のたもと、川岸に座り込んでみると、引き込まれそうな錯乱と共に、落ちてはならないという反対の気持ちの妨げているから不思議である。これからの生活はもぬけの力う同然だった。考えることといや、仕事も力が入らず、文を書く気にもならず、全く希望を失ってしまった状態だった。

向に心を向け、今の気持ちをどう処理していったらよいのだろう。悲しくて悲しくて気持は下向くばかりだった。こうゆう状態で卒業して一年、めぐってきた春を迎えた。裏の次丁草の香が高く鼻をつく。入学という希望はあるはずんだと声を聞く。就職のため教会に行く人の噂を耳にする。桜の花の傾りも聞くと、私の心はぜんぜん落着きま

失ってしまった。
この頃、八幡に出て製紙所に働いている兄が、八幡に出

てこないか、職は何とかなるから、と声をかけてくれた。悪事は即座だった。父もこの時の私の状態を見ていたため、許してくれた。(兄は寮生活で家に送金するでもなく、難儀難儀に、ダンスに、お酒にとおぼれ、乱れきった生活をしていることが家に知れていた。一度は母が勘当同然の手紙を出したこともあった。)



兄の状態、そのうえ私が決まっているわけでもなく、娘一人で家を離れさせるとは、千ヨソト無鉄砲なようだったの、そんなことをやかく言うのさえはばかれる私の状態らしかった。ともかく今の状態を要えてやらなければと父は考えたらしい。

私は住所前も決っていない八幡の知人宅をあてにして出てきた。兄の知人の紹介で、すぐ中央区の靴屋に勤めはじめた。個人経営の靴屋の店員、一日二日と通ったが、どうしてここで満足できよう。夕方、店の前を通る人々の流れを見ては、充たれぬ自分の心を思っ

て淋しかった。
行く先に希望が持てなかった。
今日もまた 夜道に過し、我が生業に

ふっと頼ってみたとき 神という存在

何か頼りたかった。二日続けた店員も四日回にはどう

しても行く氣がせず、辞めてしまった。

その頃、丸九といつていた今の丸物の入社試験があったので、兄の友人に紹介してもらって受けたが駄目。一方兄と一語に住む所を探し廻っていたが、少しも道が聞かれなかつた。取もなく、住む所もなく、知人の家にフラフラスとしてゐるわけにもゆかず、家が見つかりましたらまた出てくると兄に約して、一応御里へ帰つた。

五月になつて家が見つかりましたといふ兄からの知らせが入り、私は大喜びですぐ一通りの荷物、フットン、衣服、食器類少しをまとめて送り出し、八幡にとんで来た。家は西水通町四丁目、花澤中学の上。六畳と四畳半、台所、便所つき、水通は二軒協同だが、その頃にしても六、七、八の家族は守く、二人にはもつたないような家だった。兄の会社の友人の後で、そのうえ近所の人達が私たち二人にとつても親切にしてくれた。

こうして八幡での生活が始まった。驚いたことに、兄の荷物は薄い布団の上下、小トランプ一つだけであつた。背広、オーバーに代わる襦袢が大々な荷物だった。聞いていた兄の生活ぶりから私の腹裡を走る。そして目前のこの有様である。不孝だった。何とかしなければならぬ。この時すぐ教会へ行きたい……いや行かなければ

私の生活は駄目になつてしまふとはつまり悟つた。私は自分一人の力というものはつきり知つていた。頼らなければ、もうどんどんこぼれ落ちてしまふと。

夕焼けの美しかったその日、駅止めにしてあつた私の荷物を足踏車まで取りに行つた。歩いていく道に黒崎パブテラスト教会の十字架を認めた。ここなら歩いて来られると兄と語つた。



黒崎でお茶、茶わん、箸、包丁、マナ板、バケツと生活に最低必要なものを買ひ置えた。ガラコとした部屋、近所の方からいたゞいた食卓、御里から持ってきた千ヤチ茶ダンス、これだけが部屋を飾るものだった。押入れの中に30

不孝とほのかな希望の生活が始まった。

とにかく早く教会へ行きたいという氣持でいつぱいだった。昭和二十六年五月六日のことである。

……兄を送り出したらあと掃除して荷物してと時間が余る。二、三日経つたある夕方、近所の方に前田の曹長通りに教会があるはずと教えられて、兄と二人で散歩がてら探しに行つた。

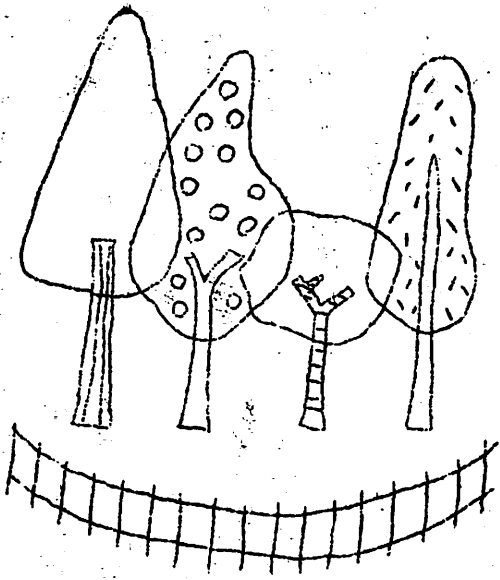
天候は散歩に丁度よかつた。杖園アパートの建築工事中

て道はがタガタに悪かった。下駄ばき、手製のスラック
ス、ブライウス姿だったことを覚えてる。

教会に十字架が立っていらなかったので、何人かの人に尋
ねてやうと探し当てた。掲示板に貼り出された集会案内
を読んだ。火くエ曜、早天祈禱会、午前六時より。

水曜、祈禱会、午後七時半より。日曜……。

その日は金曜だった。明日午前六時に承てみよう、と決
めると、求めていたものが目前に得られる俊びとこの中
に私の本当の生活が果してあるのだろうかという不きとで
複雑な気持ちのまま、家へ向った。——つゞく——



編集後記

- 「天高く馬肥ゆるの秋」ここにぶどうの木や四
字の発行できました。 皆様のお祈りを感謝し
ます。
- オ一号の発行が昭和四十年です。約一年に一
回の発行ということになります。
- 毎度のことながら今回も、原稿をいただいたか
ら発行までにかかりの日数を要しました。前
田教会の新しい格言「ぶどうの木 忘れた頃に
やってくる」
- 何とぞこれにこりずた、次回も御登稿下さい。
- 前号はタイプでしたが、本号は試験的に手書き
でやってみました。
- 印刷、製本は青年会でやっていたときました。
感謝します。

昭和44年10月5日 印刷

昭和44年10月5日 発行

発行 八幡前田教会

編集 正野真光